

十二月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（桑原正紀選）

「ひとりもいよいよ」 日影 康子 富山

秋明菊のみどり濃き葉のまん中にひそかに光る蟬の脱け殻
夫逝きて独りの部屋は寂しけれどマスクつけずにくしゃみを放つ
旧友より遅く届きし弔慰状の「ひとりもいよいよ」に泣き笑ひする
励みても休みても褒むる人無けど早朝一時間を寺庭の草引く
独りとする夕餉はさみし奥庭の築山にしろく百合暮れのころ

朝のこゑ 木畑 紀子 京都

はまゆふの蕾の鞘のくろろずみて剥けばぞろぞろ夜盗虫出づ
咲かぬまま夜盗虫に身をささげたる浜木綿姫のあはれ犠牲死
あたへたる金柑の葉をたべつくしあをむし少年どこへ消えたか
雨後の木に柔身をのべて角をだすでんでんむしは雌雄同体
足首をぬらしてあるく草の径ちちろの朝のこゑがみちびく

ネット署名 田宮 朋子 新潟

南溟にある台風の裾ならむ今日の秋ぞらみだりがはしき
天空の金貨のやうな円光がさりさり照らす魚沼盆地
満月の近くにありてきららかに木屋ジュレターひとつ輝いてゐる
ナンバーの紐ポイントに餌ぶらさげて国はカードの申請急かす
秋の野の草葉こぼるる一滴の意見とどけとネット署名す

農の歌 鈴木 竹志 愛知

剛直の歌にぞあると感服し『雉子は走れり』読み終へにけり
大会で会へば喜多氏の農業と民宿の話聞く惚れ惚れと聞く
農に生き農の歌ひたに詠みて来し喜多功氏の歌「コスモス」に無き
電話には相手がありて相手には相手の事情がありてつながらない
つながらない電話ばかりの火曜日之夜はやむなく読書に回す

☆ ☆

水島 晴子 兵庫

奥村 晃 作* 東京

半面は夕日にしろく照り映えてあべのハルカス野の遠に立つ
大き目の翅を地に敷く落蟬よきのふよりけふ翅に土染み
冷蔵庫の側面にふと身を寄せて肩のあたりにぬくもりもらふ
生きる意思その背に見せてリユック負ふ九十五歳買出しがへり
食べあますトマトソースにひたひたとバスタの先端があかく尖れり

武田 弘之 神奈川

森重 香代子 山口

花の名か「宇宙」の謂か「コスモス」と名づけ給へり七十年前
巻頭文「宇宙の花」を創刊号に寄せ給ひけり釈道空は
作者名の五十音順なる詠草欄に椋二作四首ありて光れり
創刊号の口絵「素描」はわが生れし年にブラックが描きたる絵ぞ
「コスモス」の創刊号に歌の載る三百一名親し今亡し

高野 公彦 千葉

古屋 祥子 群馬

わが未来に今日より若き日は無し、と思ひて励む夕餉の支度
吾亦紅よりも地味だがひしひしと日本ぢゆうに吾亦老ある
酒といふ（液体美女）を待らせて夜々樂しめり伊予猿われは
老い我の日にさまよふ妄想の森は過現未混じり合ふ森
不可解な歌を解釈無しで褒むあたかも歌の靈感商法

原阿佐緒論でデビューの小野勝美死んじまったね疎遠の後に
月々の「コスモス」で読みき杜沢光一郎の字余り気味の自在の歌を
ひよろ長い茎の尖端に白い花を咲かす雪の下は日蔭を好む
白・青・赤の紫陽花庭に咲き盛りわが八十六の誕生日今日は
我が父は八十六で逝きしかど我はもう少し生きさせてもらう
一降りののち青空の戻りたる庭に出で来て草を抜きをり
台風のさなか安らに微睡めり思ひみざりしわが放胆よ
液体が個体にははるときの音ころと音して水が出来る
山の陽を浴みたる墓碑のあたたかし胸処に懐き立ち去らむとす
けふ唯一わがなししこと花提げて墓参の山路辿りたること
「誕生日おめでたう」と集ふうからやから内実は馳走を期待するらし
手作りのカレンダーあと三月分追加して季節の花など描く
「コスモス」を一ページ読むに目が痛む斯くも減りゆく視力哀しも
めづらしく湿度少ない晴れの日よ取込めるシャツが肌よろこばす
齢古れど脳はやはらかにして置かう自我も主張もみんな収めて

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

老いおほき朝のスーパーその一人われは並びぬ有人レジに
デルタからオミクロンへと移り来て駅前広場に秋茜とぶ
川上へ秋の鷗は翔びゆけり江戸川支流の境川ここ
スマホ禁止車両が欲しもお隣りの指の動きに神くまささくれつ
文庫本読む気力なし目を閉ちてスマホ地獄の地下鉄にある

桑原 正紀 東京

小島 ゆかり 東京

ただ歩く緩慢単調が苦手にて一時間歩くは苦行に似たり
走り出しさうになる脚なだめつつ一時間ほど歩けり日々
区ざかひを越えて出会ひし大工事現場は確か元豊島園
豊島園で遊びし五十年前と同じ秋日が今日も差せるよ
山形や秋田に帰りゆきにける友のその後を知らず五十年

狩野 一男 東京

島田 暉 神奈川

俺達はシラトリショウゴいつからかシロトリセイゴ、白鳥省吾
〈ボブ・ディランながれくる〉歌あることも凄く宜しい歌集『月夜野』
小さいがしかし生涯引き摺つてゆかざるを得ぬ出来事がある
すすむ秋、地政学とか読んでからダーティハリー症候群へ
老醜と言ふならば言へ我は行くゴルゴの道をしゆがしゆがとゆく

ウクライナの原子力施設を攻撃す常任理事国のプーチンロシア
病院や学校などもミサイルで全破壊せりロシアのプーチン
人間の絶えぬ戦争、森林の伐採により内から病む地球は
極地にも砂漠、熱帯、高地にも地球のいづこにもヒトは住む
タイトルは『ヒトものがたり』ひと粒の水惑星の一〇〇シヨットストーリー万年小説
澄む水はむらさを帯び洗顔のまぶたにぶだうほどのふくらみ
スリッパやコンセントにも霊が棲む秋なり翳と光はおなじ
くだものに蜜は満ちつつ胸に陽は溜まりつつ秋 なにも還らず
ゼレンスキー大統領のシャツがまた長袖になり 止まぬ戦争
行き方がふたとほりあるその街へ行く明日へはどのやうに行く
向日葵の花の寝息に耳を寄せ戦なき世を祈りつつける
太陽の光たつぷり吸ひ込みて戦きらひし向日葵の花
ミサイルの弾道の下生き継ぎて向日葵の花戦をきらふ
終戦の光を浴びて向日葵の畑にきらめく黄色のほほ笑み
にはか雨朝に止みしが向日葵の花の顔面朝日を吸へる

大松 達知 * 東京

清水 正子 神奈川

きまじめな副校長の眉のような▲^{やま}のあるある明朝書体
はげしい雨と非常にはげしい雨が降る予報のありて東京地方
青くない鍵だけ青い鍵と呼ぶ三人だけがこの家に住む
枕カバー洗つといたと言われたり11時間労働終えて
叱られたことのいまだにない職場叱ってもらったことない職場

津 金 規 雄 神奈川

小 嶋 一 郎 佐 賀

入院も非日常の旅 検査待つ白き室内ドビュッシー流る
薬剤の微量の液にあつけなく睡りに墮ちる身は若からず
内臓を閲する機器なり撰と排の竅^{けう}より入りて映像を見す
おのおのの流動食にわづかづつ風味の差あり(餐)楽しまん
夜の青葉見えねど聞こゆる青葉木菟 病室の窓山に向かへば

小 山 富 紀 子 京 都

後 藤 美 子 北 海 道

改装の終はりし部屋に亡き母の顔も映しし鏡を掛けぬ
ひさびさに折づる折れば指惑ひ飛んでゆきたる時の恋^{こほ}しも
薬包紙で母の折りたる鶴たちのゆくへ思へば星のまたたく
タイマーは今日も2分でスタンバイ昼もそーめん夜もそーめん
今晚のメニュー告げれば弟のうれしげな声「赤にする? 白にする?」

朝挽ぎの桃が届きぬコロナ禍の透き間に生きるわれには甘露
窓あけて秋めく風を入れしから積ん読だけの本も目覚めむ
ウクライナ民謡がルートと知りてより反戦歌(花はどこへ行った)が好き
べた風ぎの台湾海峡航きし日も世界のどこかが戦場だつた
彼我わかぬ呻きに目覚め水を飲む野分だつ夜は夢も騒がし
渡るまへ青信号の点滅に出会へば止まる老いの慣ひと
目障りと日ごろは思ふ隣り家の高塀がけふ北風^{きたかぜ}を阻む
片側に蓋なき溝のあることも知り尽す道わが家へ続く
黄揚羽の纏れ合ふ様窓に見て日記に誌す籠りのひと日
野^の阜^{づかき}を見るたび憶ふ少年の日に^の出遇^でひたるかの野兎^のを

たのしげにテレビを見つつ笑ふ夫九十歳近き夫婦となりぬ
「八十歳^でも」とふ色付き広告あり「八十歳以上は対象外」と読む
朝夕の炊ぎの意志と体力あり先行きの日々を今は思はじ
道新も朝日も一面トップにて大活字なりゴルバチョフ死す
うつし糸の老いしゴルバチョフまざまざと過ぎにたる時の長さを見せて

福士りか 青森

田中愛子 埼玉

生徒らがマスクはづせば教室は同窓会の空気となりぬ
コロナ禍と言はれ三年 目に見えぬアクリル板を心に立たす
黒マスク禁止はせねど生徒らのなかに忍者の紛るるごとし
椰揄されしアベノマスクも功績のひとつとなりて国葬断行
国葬のニュース聞きつつ薬代一万六千円を支払ふ

藤野早苗 福岡

橘芳園 新潟

行政の施設閉鎖の一言の下に贈賞式準備撤収

これまでにない規模といふ台風の目の中にある無風五時間
吹き返す西風荒れてナンマドルはめ殺しの窓したたかに打つ
南海の果てに生れたる台風がわれの三半規管をイジる
尋常性白斑症やや進行し身のそここに白磁の白さ

風間博夫 千葉

水上比呂美 東京

実印は住民票置く役所にて印鑑登録したる印鑑
十五歳以上であれば実印を一人一本登録できる
一辺が八ミリ以上二十五ミリ以下の四角に印影入れる
実印は象牙がよろし耐久性すぐれ朱肉の乗りのよければ
実印のケースのふたをばちり閉ぢそれから長く印影を見ず

なつかしさだけが残りてあかときの夢に会ひたる人おほるなり
お徳用こはれせんべい食べるなり小さくこはれたものから順に
若き日に訪ひし統一教会を今に思へり やさしかりし人
もう秋がちかいのだらう友からのてがみにはつか風がにほへり
ずつと覚めてゐたのか今し覚めたのかわからぬままに目覚めてゐたり

金閣放火、元首相暗殺男らが糾弾せしは宗教の闇

葛藤は〈宗教二世〉にとどまらず十九世われは寺を捨てたり
真実信に目覚めし人ら寺ばなれ葬式ばなれ墓ばなれする
死者の加護目に見えざるをたのむ人僧の誦経に大枚はらふ
国民の義務その税を負ふなくて広がる土地の寺に住みきぬ

七十になつたよわたし母さんに叱られさうなワンピース着て
七十と六十九は鼈と亀ほど違ふすぐ諦めて
道幅が五歩の横断歩道でも〈赤〉なら待てり自転車降りて
自転車体おほよそ線でありひつかかりやすし特に爪先
自転車ゆるい坂道くだるとき肩甲骨がさはさはとせり

原賀 瓊子 東京

松尾 祥子 東京

コロナ下の微熱いううつ夏風邪の自己診断がこころ許なく
体感は晩夏、こよみは初秋なる九月四日のわが誕生日

この地球^{テラ}の衛兵として空にゐる月と見えたりけふの十五夜
昨日の、続きの月を仰がんとつつかけをはく十六夜による
淡交をつづけませうね秋の日に本をひらくとチェーホフが言ふ

水上 芙季 神奈川

武家屋敷を改修したといふ美術館、山本二三の絵を巡りゆく
五島市で育つた山本二三の絵の青、白、緑の陽のひかり美し
未来から手を伸ばされてしつかりとその手握つてのぼる鬼岳
あの雲はバズー、シータが見た雲か五島の空にゆつたりと浮く
明るくはない観光案内所でグラスボートの時刻表見ぬ

大野 英子 福岡

放射状に沖から流れゆく雲と風、くわんぜんに置いていかれて
季節から置いていかれるさびしさは半袖の腕がひいやりさむい
早朝の雨雲レーダーにも出ない雲がわたしに雨を降らせる
歩くのを止めてはんやりしなさいと言つてわたしを濡らしゆく雨
埠頭まで来て雨宿り遠景の鳥を照らせる朝日をながめ

手術受け座薬を入れて点滴す八百グラムの胎児宿す子
四歳の孫と一緒に画く手紙会へぬその母は病室に貼る
台風は荒れたる海よ逆巻けるわれの不安が画面に映る
入院は慣れてゐる子と言ひ聞かす庭の桔梗に犬に私に
子と孫と婿をかかへてゆつたりと大地のやうな母でありたし

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一―一五―一六

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三―四〇八